関心・意欲を高める社会科の問題発見過程

―河原和之氏の授業分析を通して―

吉　水　裕　也

The Problem-Finding Process for Raising Concern and Volition: From the Analysis of Mr. Kazuyuki Kawahara's Practices

Hiroya YOSHIMIZU

Summary

The result of this study can be arranged as follows.

１．Most questions in the lessons of Mr. Kawahara are for mastering 'explanatory knowledge'. Teaching materials and tools（'NETA'）are not used in order to fix 'descriptive knowledge', but they are used in order to make social structure understand.

２．There are two patterns in the course of problem-solving in the lessons of Mr. Kawahara. One is the student himself investigates a question, and another is a lesson which pours knowledge into a student, when a teacher gives questions. It is one of the devices for giving change to a lesson.

３．"The question for which a student is not made to feel an academic ability difference" in a lesson of Mr. Kawahara is discovered through comparison with the knowledge related with life experience to which such a difficult but a familiar talk that nobody knows was given to as information, and the knowledge related with life experience to which everyone knows it or the fundamental 'conceptual knowledge' already learned at school.

The lesson of Mr. Kawahara is making a student's concern and volition maintain by these devices.

Key words

Social studies, Junior high school, Problem-finding, Concern, Volition

Ⅰ．問 題 の 所 在

平成15年度中学校教育課程実施状況調査の結果が発表された[1)]。中学生が社会科の学習内容についてどの程度理解できているのかというテスト問題の分析結果と共に，中学生の社会科学習に対する意識を調査している。そこでは社会科学習に対する好き嫌いをはじめ，社会科学習に対する生徒たちと教員の意識が数字となって表れている。その中から生徒たちが回答した項目をいくつか選び，社会科学習に対する意識をまとめてみよう（第１表)。

第１表　平成15年度中学校教育課程実施状況調査（社会）における生徒の解答結果

社会科学習は	好きだ		大切だ		受験に無関係でも大切		普段の生活等に役立つ		普段の生活等に役立つように勉強したい	
	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×
中学１年生	53.5	41.9	70.4	24.0	63.1	27.9	53.4	33.5	54.2	34.2
中学２年生	53.5	42.1	66.9	27.2	59.8	31.9	48.2	39.0	50.0	38.5
中学３年生	52.8	42.6	75.2	20.3	68.9	24.9	60.0	30.4	56.7	34.2

（国立教育政策研究所『平成15年度小学校中学校教育課程実施状況調査　質問紙集計結果』より筆者が抽出。○は，そう思う，どちらかといえばそう思うの合計。×はどちらかといえばそう思わない，そう思わないの合計。合計値が100％にならないのは，わからない等を加えていないため。）

社会科が「好きだ」と解答している生徒は，そうでない生徒を上回っており，また「大切だ」，「受験に無関係でも大切だ」と考えている生徒は，「好きだ」を大きく上回っている。社会科学習の重要性を受験という枠組で考えたときには，概ね７割の生徒が大切だと考え，受験という枠組を抜きにして考えても，６割以上の生徒が大切だと考えている。それに対して「好きだ」という生徒の割合が，５割余であるというギャップが，社会科学習の現実を示している。

社会科学習が，子どもたちにとって重要なものであると同時に，楽しく興味を持続できるものにすること，そして社会科を好きにすることは，普段の生活に役立つ社会の仕組みを知り，ひいては公民的資質を育成するためにも，社会科学習をつくりだす教員にとっては重要な課題である。

そこで本稿では，社会科学習に対する生徒たちの関心・意欲を高めるための方略として，生徒たちの学習問題の発見過程に着目し，実際に行われた授業の分析をもとにして，生徒たちの関心・意欲を高める問題発見過程とはどのようなものかを明らかにすることを試みる。その際，河原和之氏の実践を分析の対象とする。河原和之氏は，中学生を対象とした授業の「ネタ」[2]を多数開発し，中学校社会科の実践者としては評価が定まっている[3]。河原氏のネタ実践（以下，河原実践）を分析し，どのようにして生徒が関心・意欲を持続し，問題を発見するのかを明らかにすることにより，今後の社会科授業の改善に役立てたい。

Ⅱ．研　究　方　法

（１）分析対象

ここで対象とするのは，河原実践の中でも，社会科に関する「ネタ」を用いた授業である。問題発見過程を明らかにするためには，授業記録に授業者のあるいは生徒たちから発せられた問いが書き込まれている必要があり，また一人の実践者のそのような授業実践報告を大量に集めることは通常困難である。しかし，『21　中学授業のネタシリーズ』[4]では，実際に実践されたものが授業実践報告の形式で書かれており，授業で用いられた問いの構造や生徒たちの応えがわかるようになっている。このように授業実践報告としての形式が整っているということから，本シリーズの授業を分析対象にすることにした。

（2）分析フレームワークの設定

本研究の目的は，河原実践の分析から，中学校社会科授業において学習者の関心・意欲を高める問題発見過程について明らかにすることである。

そのために河原実践が，どのような知識を学習者に獲得させようとしているのか，またどのような方法で学習者に学習問題を把握させ，追究させようとしているのかを抽出しなければならない。そこで，学習の内容面と問題発見の方法面に分けて視点を設定し，実践を分析する。

ところで，「ネタ論文」では，実際の授業に則して授業者の問いと学習者の応えを書き込むことが基本形となっている[5]。ネタ論文の中から，主要な問いを抽出することによって，その問いがどのような知識を要求するものであるのかを知ることができる。また，学習者が自ら問いを発見する過程が授業に組み込まれているかどうか，さらにどのような手法を用いて問題発見をさせているのかを分析することによって，授業方略を読み取ることができると考えた。

上記を踏まえて，以下のような視点を設定した（第２表）。

第２表　分析フレームワーク

視　　点	内　　容
1　獲得させる知識	知識の内容
2　問題発見過程	問題発見過程の組込みの有無
3　問題発見方法	理想と現実のギャップ認識の方法
4　情報収集手段	情報収集に利用した資料

（筆者作成）

視点１では，「問い」と「応え」の分析をすると，どのような内容を授業で扱おうとしているのかがわかることから，問いの質を分析をすることとした。特にここでは知識の質を，記述的知識，分析的知識，説明的知識，概念的知識，規範的知識[6]に分け，そのいずれを獲得させるネタであるかを分析した。

視点２では，学習者が自ら知りたい，追究したいという学習問題を発見することが関心・意欲の高まりに影響することから，問題発見の過程の有無について分析した。特に，ここでは授業者が計画指導の中にも学習者に学習問題を発見させようと志向しているかどうかについて分析した。

視点３では，授業者が学習者に問題を発見させるために，どのような手だてを取っているのかを分析した。特にここでは学習者の中にすでにある知識を理想（安定）状態とし，そこにそれとは異質な新しい知識（現実）が与えられることによる認知的不協和状態（理想と現実とのギャップ認識）をどのように作り出したのかを分析した。

視点４では，問題発見に至る過程において用いられた資料について整理した。これは河原実践が，どのような技能を用いて問題発見をさせようとしているかを分析するためである。

また，上記の４つの視点以外に，社会科学習の内容面に関する事柄に関しては，備考欄に整理した。（第３表）

Ⅲ．分析結果と考察

以上のフレームワークを用いて，実践分析を行った。

分析を行ったのは，『21中学授業のネタ　社会』シリーズにおける地理的分野のネタである（第３表）。

第３表　河原実践の分析結果

	上段：ネタのタイトル 下段：主要な問い	視点１ 獲得する知識	視点２ 問題発見過程	視点３ 問題発見方法	視点４ 情報収集手段	備考
1	中国の姓名と人口 姓と名前の組合せから考えて，最も多い男性の姓名は「李英」女子は「李華」だから，同姓同名の人がかなりいることになる。そうだと困ることってないかな。	記述的知識	×	―	中国人に多い姓	
2	台湾のアイドル歌手 しかし，このグループ（小虎隊）は1993年に解散しました。その理由は何でしょう。	説明的知識	○	生活知	小虎隊の写真	日本にはない徴兵というシステム
3	タイのコンビニ ガムもポッキーも現地で作っています。どうして現地で作った方がよいのでしょうか。	説明的知識	○	生活知・学校知（概念的知識）	ガムなどの実物，レシートの実物	大きい賃金格差
4	新聞紙よりも大きい投票用紙 どうしてシンボルマークが投票用紙に印刷してあるのかな。	説明的知識	○	生活知・学校知（概念的知識）	インドの巨大な投票用紙の写真	低い識字率。多数の言語
5	ユーゴ・コソボの小学校 この場所は３階から４階へ行く階段なのだが，壁によって行き来できないように遮断されている。どうしてだろう。	説明的知識	○	生活知	コソボの学校の写真	民族問題
6	カスピ海って海なのか？湖なのか 1992年にカスピ海のあるところで海底油田が発見されました。この油田はどこの国のものなるのか？（なぜロシアやイランはカスピ海を海だと主張するのか）	説明的知識	△	学校知（概念的知識）	地図	海底資源は沿岸国のもの。国連海洋法条約
7	搾乳ロボって？ このロボットの実用化によって酪農家の生活は変わるのだろうか？	分析的知識	×		搾乳ロボの写真	畜産業の機械化
8	雪ってじゃまもの？ この写真もこのツアーの様子をあらわしたものだ。２枚の写真からどん	分析的知識	×		かんじき，列車の写真	町・村おこしのための工夫

	なツアーなのか想像してみよう					
9	日本一低い富士山 どうして富士山の高さを3776 m から3776 mm に変えた大潟富士なんてのがあるの？	説明的知識	△	生活知・学校知（概念的知識）	大潟富士の写真	町・村おこしのための工夫
10	TOKYO X なぜ東京近県に豚の畜産が多いのだろう。	説明的知識	○	生活知・学校知（概念的知識）	写真	都市や都市周辺地域に対するイメージ
11	「家族経営協定」を結ぶ農家 このような農家が増えているが君たちはどう思うか。	説明的知識 規範的知識	△		協定書（日経新聞 HP）	労働内容の明示，主婦の労働
12	過疎の村・富山村 村には産業らしいものはないから税収も少なく，役場の人件費もまかなえない状態です。どうして村民の生活を保障しているのだろう。	分析的知識	×		富山村に関する現状。 空欄補充プリント	
13	日本の人口重心の町 平成13年には人口移動(ママ)によって美並村は重心ではなくなりました。隣に移ってしまったのです。どのように移動したのですか。	分析的知識	×			首都圏への人口集中
14	航空機で運ぶトマト（岐阜） どうして航空機をつかってまで，トマトを大阪まで運ぶのですか。	説明的知識	○	生活知・学校知（概念的知識）	写真	商品のイメージアップの工夫
15	漁業の島の嫁さがし(下関市蓋井島) 他の島では人口が減っているのに，どうしてこの島では人口が増えているだけではなく，若い人の人口が増えているのか。	説明的知識	○	生活知・学校知（概念的知識）	人口動態グラフ	過疎化対策
16	オレンジジュースの表示からみえる自由化 1992年以降バヤリースオレンジの表示が変更された。どうしてこの年から，みかん混合でなくなったのか。	説明的知識	○	生活知	缶ジュース，10年前のもの	オレンジの輸入自由化と生活への影響
17	早場米のトップランナー どうしてこんなに早く米をつくろうとするのか。	説明的知識	△	生活知・学校知（概念的知識）		台風や高収入のための工夫
18	長崎のじゃがいも どうして長崎が全国第２位の生産額なのだろう。	説明的知識	△	学校知		江戸時代の長崎の役割

19	石炭から魚釣りへ 町の消滅の危機になって住民の提案でこの島の資源である「海」に着目した過疎対策が行われました。どんな取組でしょうか。	分析的知識	×		人口の推移	過疎化対策
20	九州が独立すると 日本から九州が独立するとどうなるか。	―		九州中心の地図		
21	都道府県 PR ポスター	―				習得知識の確認・発表
22	長崎学プレゼンテーション	―				習得知識の確認・発表
23	違いのわかる太平洋と大西洋 どうして太平洋は太で，大西洋は大なのだろう。	記述的知識	×		クイズ	
24	カメルーンの細長い国境線 a. ケニアとタンザニアの国境線はキリマンジャロ山のところで，どうして曲がっているのか。 b. カメルーンの国境線は，なぜチャド湖まで長く延びているのか？ c.（カメルーンでは）東アフリカのスワヒリ語にあたるような民族伝統に裏打ちされた共通語はない。どうしてか。	説明的知識	△	学校知（説明的知識）	国境と民族分布が描かれた地図	連続した「なぜ疑問」の配置
25	マクドナルドで世界国調べ どうしてマクドナルドのない国での内戦，ある国とない国とは戦争があるのだろう。	説明的知識	△	学校知（概念的知識）		黄金のMアーチ理論に基づく説明。マクドが進出している国からアメリカを中心とした世界構造の理解
26	ひらがな都道府県パズルづくり	記述的知識	×			
27	都道府県サイコロゲーム	記述的知識	×			
28	さて？ここはどこですか？	方法知	×			地理的技能の習得
29	ぼく小阪のドラえもん 校区の課題を考えてみよう。	説明的知識	△	生活知		地域の課題発見からプレゼンまで。子どもたちが発見する課題からは説明的知識が獲得される

30	離島の役場 なぜ竹富町の役場は石垣市にあるのか。	説明的知識	○	生活知・学校知（概念的知識）	地図，副読本の奥付	離島の交通手段
31	アメリカとアフガニスタンの命の価値 ９．11テロの時のアメリカ人犠牲者への補償とアフガニスタン誤爆による補償の金額はいくらか	説明的知識	○	生活知		アメリカ：２億４千万円 アフガニスタン：13万円 平等のはずの命の重さ
32	中国のオートバイは「HONTO」	説明的知識	○	写真，資料		（なぜ中国が世界の工場となったのか）品目，賃金，技術水準
33	災害と人間 人々が災害を利用してきた例はないか。どのように利用してきたのか。	記述的知識，分析的知識	×			
34	高校選抜優勝校から日本の気候を考える 優勝回数の多い都道府県と気候とはどういう関係があるだろうか	―	―		都道府県別優勝回数	因果関係があるのかどうかは疑問
35	ただで泊まれるホテル （宿泊中１分以上富士山が見えなければタダという企画は）なぜ１月にしかやっていないのだろう。	説明的知識	○	生活知・学校知（分析的知識）		太平洋岸気候の特徴
36	新聞記事から考える中国の「一人っ子政策」 一人っ子政策の現状はどうなっているのか。	分析的知識	×		新聞記事，空欄補充プリント	
37	千代田区って驚き？ どうして千代田区には人口ゼロの町があるのだろう。	説明的知識	○	学校知（概念的知識）		地価，場所
38	食べ物をめぐるタブー どうしてヒンズー教徒は牛肉を食べないのでしょう。	概念的知識	○	生活知	冷蔵庫内の写真	文化による違い
39	食べ物から考えるマレーシア マレーシアでは，病院の入院時の食事はどうなっているのか	説明的知識	△	学校知（概念的知識）	マレーシアの病院での食事のメニュー	問いは分析的知識を問う形になっているが，実際には説明的知識を習得させている
40	燃えないタオル どうしてこんな変わり種タオルをつくるのだろうか	説明的知識	○	生活知	様々なタオル製品（実物）	「なぜタオルの生産が落ちたのか」という問いがヒント

41	洋食器生産地は今	説明的知識	△	生活知		（燕市はなぜたびたび生産形態を変えてきたのか。）
42	インドネシアの祝祭日と宗教 どうしてこのような割合で祝祭日を決めているのだろう	説明的知識	○	生活知		日本の祝祭日との比較
43	マクドナルドのアルバイト あなたが高校に行き，マクドナルドでアルバイトして，そのお金を何に使いますか？３つ書いてください。マニラの20歳の女性の学生に聞きました。３つは何でしょう。	説明的知識	○	生活知		（なぜ２つの国にこのような違いがあるのか
44	正座をしなさい！は日本特有？ （なぜ国によって座り方や靴についての様々な文化があるのだろう）	概念的知識	○	生活知		座り方や靴についての習慣の違い

（表中の No. １～６は，河原和之，河原紀彦，森口洋一，松岡日出雄，吉水裕也著，授業のネタ研究会中学部会編（2001）『21　中学授業のネタ　社会①　世界地理・歴史・公民』，日本書籍，199 p. に，No. ７～22は，河原和之，河原紀彦，森口洋一，奥田修一郎，吉水裕也著，授業のネタ研究会中学部会編（2002）『21　中学授業のネタ　社会②　日本地理』，日本書籍，197 p. に，No. 23～44は，河原和之，馬場一博著，授業のネタ研究会中学部会編（2003）『21　中学授業のネタ　社会④　地理』138 p. にそれぞれ掲載されている河原氏が執筆したネタである。視点２の○は，学習者が学習問題を発見するもの，△は授業者が学習問題を把握させるもの，×は問題発見過程が欠落しているものを指す。筆者作成。）

（１）社会のしくみを理解させる説明的知識の習得

分析結果から，河原実践の第１の特徴は，説明的知識の習得を目指した授業となっていることがわかった。分析した44実践のうち半数以上を占める26実践が説明的知識の習得を目指している。

ここから，ネタ実践が単なる記述的知識の定着強化を図るためのものではなく，社会事象の因果関係を中心とした理解を通して社会認識形成を目指しているものであることが読み取れる。

（２）問題発見・解決型授業と教え込み型授業との併存

河原実践の第２の特徴は，問題発見過程を意図的に組み込み，生徒に「ウソ！」と疑問を抱かせるネタの組織と，一方で授業者が情報収集と整理を行い連続的に「なぜ疑問」と「どのように疑問」を生徒たちに投げかける授業の併存である。生徒が問題発見をするものが16実践に対し，授業者が連続的に問いを投げかけるものが10実践である。

生徒が学習問題を発見する例に関しては，その後予想を行わせたりする問題解決学習型の展開になるものと，明確にはその過程をとらないものとがみられる。つまり，生徒が調べ探究していく過程をとるものと，授業者が誘導的に問いを投げかけて，関心や意欲を持続させていくものがある。

また，授業者が連続的に問いを投げかけながら授業を組織するタイプのものは，授業者自身が問いをブレイクダウンし，全体の構造を作りながら構成されている。

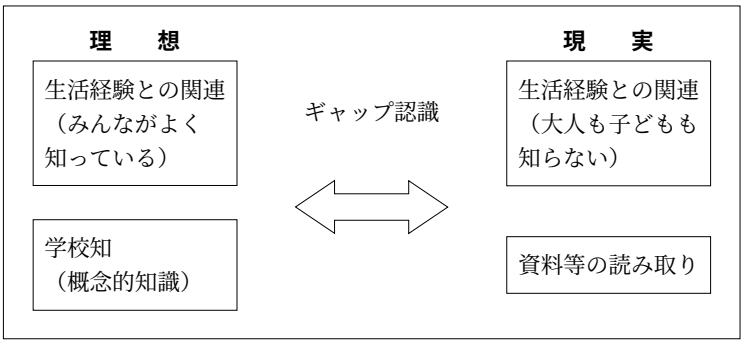
河原氏は，「授業は変化が大切で，考えるだけの高尚な授業のみではあきる。同様に『謎解き』だけでもあきる。いろいろなバージョンをちりばめて変化をもたせるのが授業の醍醐味である」[7]と述べていることから，ネタの授業の中にもいくつかのパターンを持たせていると考えられる。

（３）理想・ゴールとしての生活知・学校知（概念的知識）と現実との比較

学習問題の発見は，すでに学習者が持っている知識と，授業で新たに獲得する知識との間に何らかのズレが生じているときに，そのギャップ認識をする段階で生じる[8]。

河原実践の３つ目の特徴は，すでに生徒たちが持っている知識（理想，ゴール）との比較対象として授業で新たに与えられるものに生活経験からの知識を多く設定しているということである。生徒たちの身近な事柄で，子どもだけではなく大人でも知らない知識を授業で提供し，前提となる生徒たちがよく知っている身近な事象と比較させているものが19実践と多い。

河原氏は，「これらの問いは学力差がない」という言葉を用いている[9]が，特に学習者にとってこれらの問いは逆に考えると，「生徒に学力差を感じさせない問い」となっている。学力差を感じさせないための方略として，河原氏は具体的な手法を述べていないが，本研究の分析結果から，それは生徒たちに問題発見させる際に用いられる情報収集過程に，生活経験と関連させた，しかも大人も子どもも知らないもので，今までの自分の生活経験で得た知識と比較すると矛盾を来すもの，さらに学校知と比較させる場合には，基礎的な概念的知識との比較をさせるような新しい事実を生徒たちに情報として与え，理想と現実とのギャップ認識を行わせている。学校知のうちでも高度な説明的知識との比較をさせないことで，生徒間学力差が意欲の差となって反映されないように工夫がなされている（第１図）。



第１図　河原実践における学力差を感じさせない問題発見の構造（筆者作成）

（４）情報収集手段としてのグラフ，数値資料

河原実践の４つ目の特徴は，問題発見のために生徒たちが情報収集をする手段として，資料の読み取りを行わせているということである。一般的によく行われていることであるが，内容知ではなく，方法知的側面からアプローチさせることによって，生徒たちに学力差を感じさせないままに，問題発見に到達させる一つの工夫である（第１図）。

Ⅳ．結

以上，地理的分野を対象として，河原和之氏のネタ実践を分析してきた。

本研究の成果は以下のように整理できる。

① 河原実践における学習問題は，説明的知識を獲得するためのものが多く，授業のネタが単に記述的知識の定着強化のために用いられているのではなく，社会の仕組みを理解させるために用いられていることがわかった。

② 河原実践における学習問題の解決過程には，生徒自身による追究と，連続した問いによる知識の注入の２つのパターンがあり，それらは授業に変化を持たせるための工夫の一つであることがわかった。

③ 河原実践における，「生徒に学力差を感じさせない問い」は，子どもだけでなく大人でさえ知らない，しかも生活経験と関連させた新たな事実を現実の情報として与え，誰もが知っている生活経験と関連させた知識や（極少数ではあるが）学校での既習知識としての基礎的な概念的知識との比較を通して発見されていることがわかった。

以上の具体的な工夫を通して問題を発見させることにより，河原実践が生徒の関心・意欲を持続させていることがわかった。

以上が，本研究の成果であるが，残された課題もいくつかあるため記しておきたい。

まず，本研究の分析対象が，地理的分野の実践に限定されているため，それを歴史的分野や公民的分野に広げ，中学校社会科全体としての分析を行いたいという点である。また，河原実践には，明らかにネタ実践とはねらいを異にするものがあり，それらを含めて実践を導き出す原理の分析を行いたいという点である。

【註】

1）国立教育政策研究所（2005）『平成15年度小学校中学校教育課程実施状況調査　質問紙集計結果』，pp. 1–12.

2）「ネタ」とは言うまでもなく「たね」の倒語であり，有田和正氏などが教材，教具，学習方法などに対して使用している。
有田和正氏の「ネタ」に関する教材構成に関しては，關浩和（1990）小学校社会科における「ネタ」教材構成の方法論―有田和正氏の単元展開を考察対象として―，社会系教科教育学研究，第２号，pp. 75–80. に詳しい。

3）中学校社会科に関する多数の著書，実践報告や研究論文がある。

4）『21　中学授業のネタシリーズ』は，日本書籍から出版された著作物で，河原和之氏が執筆したものには，以下のものがある。
河原和之，河原紀彦，森口洋一，松岡日出雄，吉水裕也著，授業のネタ研究会中学部会編（2001）『21　中学授業のネタ　社会①　世界地理・歴史・公民』，日本書籍，199 p.
河原和之，河原紀彦，森口洋一，奥田修一郎，吉水裕也著，授業のネタ研究会中学部会編（2002）『21　中学授業のネタ　社会②　日本地理』，日本書籍，197 p.
河原和之，馬場一博著，授業のネタ研究会中学部会編（2003）『21　中学授業のネタ　社会④　地理』138 p.
河原和之，馬場一博著，授業のネタ研究会中学部会編（2003）『21　中学授業のネタ　社会⑤　歴史』138 p.
河原和之，馬場一博著，授業のネタ研究会中学部会編（2003）『21　中学授業のネタ　社会⑥　公民』138 p.

5）瀬谷正行氏は，授業のネタシリーズの巻末に掲載された「授業のネタ」論文の書き方の中で「主たる発問・指示は授業記録を読むとき眼につくように，改行して，＜　＞でくくり，示す」と述べている。

6）知識の分類に関しては，岩田一彦（1991）『小学校社会科の授業分析』，東京書籍，p. 38–45. に依拠した。

7）河原和之（2005）学びたい！学ぶにたる学習課題を―中学「経済」の授業から授業改革の方向性をさぐる―，教育，2005年９月号，国土社，p. 108.

8）吉水裕也（2002）問題発見能力を育成する中学校社会科地理授業の設計―単元「日本の工業立地」の開発―，社会科研究57，pp. 61–70. を参照されたい。

9）前掲書７），p. 107.